

老親介護はどれだけ続くのか？：子世代の視点から

How Long Does Elderly Care Continue? :

From the Perspective of the Child Generation

中村 真理子 (国立社会保障・人口問題研究所)

Nakamura, Mariko (National Institute of Population and Social Security Research)

nakamura-mariko@ipss.go.jp

20世紀後半以降の日本社会では少子高齢化の進展によって高齢者の介護需要の増加と介護の担い手の不足が生じており、今後さらに大きな社会問題になっていくと予想されている。そして、かつては老親の介護は実質的に「嫁（長男の妻）」が担ってきたが、近年は誰が担うのかが不明確になってきた（井口 2017）とされる。このような背景から高齢者の介護を扱った研究は数多く行われてきた。しかし、「ある個人がライフコースの中で家族（老親）介護行う確率はどの程度なのか？」「ある個人がどのような関係の相手に対して、どの程度の介護を行うのか？」といった基本的な疑問に答え、個人のライフコースにおける家族介護の実施経験を定量的に把握することは必ずしも十分には行われていない。

そこで本報告では1921～1940年出生コーホートと1940年代後半～1950年代前半コーホートの男女を対象に、性別と配偶関係に焦点をあてて自分の両親もしくは義理の両親の介護経験についての実態を描出する。使用するのは日本家族社会学会が1999年に実施した「第1回全国家族調査（NFRJ98）」の高齢者調査票（1921～1940年出生コーホート）と厚生労働省が2005年より実施する「中高年者縦断調査」（1940年代後半～1950年代前半出生コーホート）の個票データである。

現時点で得られている知見は以下の通りである。「第1回全国家族調査（NFRJ98）」を集計した結果、1921～1940年出生コーホートの女性が58歳までに自分の父親を亡くしている場合、父親が亡くなるまでの間に看病を必要とした期間がなかったと回答している割合は44.8%であった。父親が亡くなるまでの間に介護の必要があった場合についてみると、調査対象者が介護・看病にかかわった期間は「1ヶ月未満」が全体の17.9%、「1ヶ月～6ヶ月未満」が11.7%、「6ヶ月～1年未満」が3.5%、「1年～3年未満」が3.7%、「3～5年未満」「5～10年未満」「10年以上」が合わせて3.4%、「特に関わっていない」「突然の死で、ほとんどする機会がなかった」の合計が13.7%であった。男性についても同様の集計をしたところ、「特に関わっていない」「突然の死で、ほとんどする機会がなかった」の割合が高い傾向などは見られたが、女性とほとんど変わらない結果であった。介護・看病にあたった期間に限ってみれば、戦前の出生コーホートであっても、男性も自身の親の介護に一定程度関わっていたことがわかる。

報告では「中高年者縦断調査」の分析と義理の両親の結果も提示し、個人のライフコースにおける老親介護がどのようなイベントであるのかをデータに基づいて整理する。